

ジェイン・オースティンの『イングランド史』¹

松原典子

1. はじめに

2013年のジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の記念切手発売は、彼女の認知度と重要性を象徴している。彼女の作品の特徴は、「田舎の村の3世帯か4世帯の家族がいれば、物語の中に書き続けるのにはまさにちょうどよいのです。」(1814年9月9日) が示すように、小さな世界を稀に見る観察眼からの描写である。幼少期、ジェインは創作作品を読み手として朗読し、それを聞き手の家族や親族が評価するという環境で育った。「習作」(Juvenilia) 創作時はこの幼少期に始まる。

本研究ノートで取り上げる『イングランド史』はその「習作」の一つである。揶揄、皮肉、笑いをキーワードとする作家オースティンの特徴が、『イングランド史』の君主描写にどのように描出されているかを、事実を併記しながら検証していく。

2. 少女期のジェイン

ジェインは英国国教会(今後、国教会と示す)牧師の家の8人きょうだいの7番目の子供で、2歳上のカサンドラ(Cassandra)とは一卵性双生児のような関係であり、『イングランド史』の挿絵はカサンドラの細密画である。

まずオースティン家についてであるが、ジェインが生まれた当時、父ジョージ(George)はハンプシャーのステーブントンの紳士階級に属していた。ただ紳士階級でも下位であったが、受けた教育や親戚関係から充分紳士階級の上位にあった。男子寄宿学校を経営する学術的な父の下、ジェインは18世紀後半のイギリスの子女としては驚くほど豊かな知識を得た。蔵書以外に、ベイジングストークの巡回図書館から最新刊の小説を借りたりした。父はジェインの読書に全く規制を与えず、男子寄宿生徒と兄弟に囲まれた環境の中、姉妹はかなり世俗的な部分を見聞きし、兄たちからの知的刺激も充分に受けた。長兄ジェイムズ(James)はオックスフォード大学で学び、帰省時には家族や近隣の知人の前で製作した笑劇を上演し好評を得た。ジェインもカサンドラとともに7歳から11歳までオックスフォードとレディングの寄宿学校で学び、家庭の天使として十分な教養を身につけた。

伯母フィラデルフィア（Philadelphia）のインド滞在中に生まれた娘イライザ（Eliza）が、自称フランス伯爵と結婚したことで、フランス上流階級社会や異国の文化、情報に通じていたといえる。またジェインの母カサンドラ（Cassandra）の実家のリー（Leigh）家は、先祖を遡ると貴族に繋がる名門で、3人目の兄のエドワード（Edward）は裕福な遠縁の養子の道が開けていた。また兄たちは「グランド・ツアー」で数ヶ月も大陸を旅行できる環境にあったことから、ジェインは少女期から上流社会を身近に感じていたといえる。5番目の兄フランシス（Francis）と弟チャールズ（Charles）は、海軍の海外部隊に勤務した。こうした環境から世界情勢やイギリスの歴史と伝統、さらに当時の社会について充分理解可能な中での習作期だった。

ジェイズとヘンリー（Henry）はオックスフォードで『ロイタラー』（*The Loiterer*）を発行していたが、ジェインはソフィア・センチメント（Sophia Sentiment）のペンネームで、『ロイタラー』第9号（1789年3月28日）に、「気づいた事だが、8号ある中で、愛とか名誉そして、そういった類のものについての感傷的な物語が一つもない。」と投稿した。彼女の「そういった類のもの」とは「駄作の類」かもしれないが、キャロル・シールズは「また別の物差しを用いて評価するならば、『重要な類の作品』」ということになる²としている。つまりジェインは当時のイギリスの子女には珍しい、はっきりした物言いをする少女であった。

幼少期から自作を朗読し、辛らつな批評を受けたかもしれないが、ジェインの語りは、自由で留まる事はなかったようだ。そして1787年、11歳の頃ジェインは「語るもの」以上に「書くもの」つまり創作を開始し、1809年頃まで書き続け、書き写された3冊のノートは全て短編で、『第1巻』、『第2巻』、『第3巻』³と表題が付けられた。ポール・ポプラウスキーの、「ジェイン・オースティンの文学修行期が、18世紀後半に流行した『感傷小説』の形式や主題の特徴に対する鋭い眼識を持った創造的文芸批評家のもの⁴」という指摘からは、習作期の作品にすでに将来の滑稽さや揶揄などが発揮されていたと考えることができる。

ところでジェインの次世代の代表的女流作家には、ブロンテ姉妹（The Brontës）やジョージ・エリオット（George Eliot）があげられる。ブロンテ姉妹は中性的なペンネーム（Currer Bell, Ellis Bell, Acton Bell）で財政的苦難を乗り越え出版し、エリオットはパトロンのジョージ・ヘンリー・ルイス（George Henry Lewes）の尽力のもと本名メアリー・アン・エヴァンズ（Mary Anne Evans）を使用しなかった。それに対して、ジェインは家族の力で出版できたという稀な存在である。

3. 『イングランド史』

14人の君主が登場する『イングランド史』の挿絵は、前述したようにカサンドラがペンか水彩で描いたもので、姉妹の共同作品である。そしてこの『イングランド史』はオリヴァー・ゴールドスミス（Oliver Goldsmith）の『イングランド史（*The History of England*, 1764）』のパロディーだということもいえる。それはジェインが自身の『イングランド史』のタイトルに続いて、'by a partial, prejudiced, and ignorant Historian.'、つまり「不公平

で、偏った、無学な歴史家による」と書き足していることから推察できる。そして1791年11月26日に脱稿し、‘To Miss Austen eldest daughter of the Revd George Austen, this work is inscribed with all due respect by THE AUTHOR’ とカサンドラに捧げている。姉への信頼がみえる。つまり『イングランド史』は、オースティン家の開放的な教育環境が姉妹の知識欲と判断力を強化し、彼女たちが十分な知識と判断力を保持するという自信と、家族の笑顔を糧にしながら執筆した作品といえる。そして‘the reader’への語りが多くあることで、幼少期の朗読からの揶揄、皮肉、コメディナーなどの喜劇性と、君主を卑小化した滑稽さを「書くこと」で表現したものといえる。

4. 『イングランド史』の登場人物⁵

4-1. ヘンリー4世

ヘンリー4世(1367-1413、1399-1413)はランカスター家初代で、プランタジネット家第9代国王である。これはヘンリー4世から6世までの3代がランカスター家で、エドワード3世に繋がる4男の家系からプランタジネット家ということになる。彼は初代ランカスター公の次女夫婦の成人まで生き残った唯一の男子で、当時のイングランド王家の複雑に絡み合った血の繋がりから、国王になる確率は非常に低かった。しかし、議会の選出で国王となったことで、議会と協調関係を保ち続けた。

即位前の1389年に従兄弟のリチャード2世から国外追放され、ドイツ騎士団に加わり、リトアニアの異教徒制圧遠征にも参加し、エルサレム、ロードス島等を訪れ、帰国後はリチャード2世への対抗心を封印し国王に就いた。フランスとの戦争、スコットランドとの関係、ウェールズのナショナリズムなど対外的に緊迫していたが、王座の死守を大前提とした。国王としての業績は、現在まで継承されている戴冠式に王を神聖なものとする「灌油式」(anointment)の採用やバース騎士団の創設、さらにイングランド国王の紋章にフランス国王を象徴する百合を加えたことである。「3個の百合の花」にしたのは、識別の容易さと三位一体に通じるという判断からである。ところで、即位までの経緯が懺悔に繋がったようで、歴代国王の埋葬地であるウェストミンスター寺院ではなく、カンタベリー寺院のトマス・バケット廟脇への埋葬を生前から希望していた。

ジェインはリチャード2世から王位を剥奪し死に追いやった事実を、“after having prevailed on his cousin and predecessor Richard the 2nd, to resign it to him and to retire for the rest of his life to Pomfret Castle, where he happened to be murdered.”と淡々と語る一方で、“Henry was married, since he had certainly four sons”と揶揄しているが、ヘンリー4世が愛人に囲まれた事実はないようで、子沢山と言いたかっただけかもしれない。また息子に王冠を篡奪されたことに関しては、皇太子が“falling ill”のヘンリー4世から王冠を奪ったと健康問題を使って揶揄し、シェイクスピア(William. Shakespeare)の戯曲を読む必要性を‘the reader’に促しているが、これは史実ではない。

4-2. ヘンリー 5 世

ヘンリー 4 世の第 2 子のヘンリー 5 世 (1387-1422、1413-22) は、父がエドワード 3 世の 4 男に繋がるプランタジネット王家の一員だが、そのエドワード 3 世がフランス国王位継承権を持つことで、ヘンリー 5 世は即位後の 1415 年にフランス国王位を求めカレー南部へ侵攻し、ヘンリー 2 世時の所領を奪回した。シャルル 6 世の王位継承者としてキャサリン王女と結婚するが、フランス国内で反乱が続く 1422 年、北フランスのモーで戦闘中に死去した。ルカ福音書の “In manus tuas, Domine, ipsum terminum redemisti.” (主よ、私の靈魂を主の手に託します) が最期の言葉だった。一方、ヘンリー 5 世は母メアリー・ドゥ・ブーンと 7 歳で死別し、荒れた少年時代を送った。またリチャード 2 世からの国外退去処分時にオックスフォード大学キーンズ・カレッジの退学を強いられたが、徹底した教育で有能な国王になったとされている。

ジェインは改心した姿を “This Prince after he succeeded to the throne grew quite reformed and amiable, forsaking all his dissipated companions” と、放蕩者だったが若き有能な国王の誕生を祝福している。また父シャルル 6 世の狂気の血筋の妻キャサリンを “a agreeable woman by Shakespeare’s account” としているが、ここでジェインがシェイクスピアから借りたと述べている原典は、William Shakespeare の *The Life of Henry the Fifth* かどうか疑問である。18 世紀以降は子女を対象に編纂された、家庭の天使教育に相応しい道徳的なシェイクスピア戯曲が多く出版されていたからである。キャサリンの人生は複雑でヘンリー 5 世との結婚生活は 2 年足らずで、その後のオウエン・チューダーとの関係は公然の秘密であり、2 人の息子が誕生している。このような事実が家庭の天使育成の時代の教本として “agreeable” と掲載されていたか疑わしいのである。

4-3. ヘンリー 6 世

ランカスター家 3 代で最後の国王であるヘンリー 6 世 (1421-71、1422-61 と 70-71) は、父ヘンリー 5 世の急逝後、わずか 8 ヶ月で国王に就き、1420 年に締結されていたトロワ条約 (Treaty of Troyes) で、祖父シャルル 6 世からフランス国王位を継承し、1431 年パリのノートル・ダム大聖堂で戴冠式を挙げた。イングランド国内では父の弟のグロースター公ハンフリーと傍流のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォートの主導権争いの中、ボーフォートのお膳立てでマーガレット・オヴ・アンジューと結婚した。ボーフォートの死後、ヘンリー 6 世はマーガレットが牛耳る宮廷ではまったく主導権がなかった。それは、マーガレット以外にシャルル 6 世と母キャサリンの遺伝的精神異常体質がヨーク家に付け入る隙を与え、1455 年にはランカスター対ヨークのバラ戦争が始まった。30 年もの戦いで、1461 年にヘンリー 6 世は退位するが、70 年に復位する。しかし翌年、再度王位を失い、皇太子の殺害やマーガレットの逮捕後、ロンドン塔で怪死した。フランスとの関係ではジャンヌ・ダルクを処刑したが、所領を失った。ヘンリー 6 世は遺伝的問題でマーガレットに弱点を握られ、政治や軍事に能力を発揮できなかったが、信仰と教育には熱心で、イートン校、ケンブリッジ大学キングズ・カレッジを創設した。

ジェインはヘンリー 6 世が “was a Lancastrian” であることで、語りを躊躇している

が、彼と“The Duke of York”の関係について、“you had better read some other history”と提案し、ヨーク公は“the right side”だと理解している。この“you”はカサンドラか“the reader”のどちらか、あるいは両方かもしれないが、ジェインのヨーク側という宣言である。また王妃マーガレット・オヴ・アンジューの“a woman whose distresses and misfortunes were so great as almost to make me who hate her, pity her.”という紹介は、ジェインの厭味だろうか。さらにジャンヌ・ダルクの“They should not have burnt her—but they did.”という描出は、イングランドとフランス間の戦争に対する不満と国内の抗争への喪失感だろう。しかし、“There were several battles between the Yorkists and Lancastrians, in which the former usually conquered.”の語りは、前述の“the right side”同様、ヨーク側という宣言である。史実ではヘンリー6世が殺され、マーガレットがフランスに帰国させられ、ランカスター統治が終了し、ヨークの時代が始まる。

4-4. エドワード4世

バラ戦争中、ヘンリー6世を逮捕し一時期王位に就いたのがエドワード4世(1442-83、1461-70と71-83)で、ヨーク家初代の国王となった。父ヨーク公リチャード・プランタジネットがイングランド王として当然の血筋だったことで、1471年の復位後、ロンドンの実力者たちや各州騎士を味方にし、国家財政の整備や王室費の充実、さらに文化面の功績が評価されている。しかしバラ戦争で活躍したウォーリック伯リチャード・ネヴィルとその弟モンタギュー卿ジョンにイングランド北部の統治を任せ、末弟のヨーク大司教を大法官に推挙し、イングランド貴族随一のウォーリック伯とソールズベリー伯の所領と兵力を背景としたが、自身はフランスにあり飾り物であった。

ジェインはエドワード4世を“his beauty and courage”としているが、整った体型と物腰のよさと無類の好色で多くの美女を愛人にしたとも言われている。また“in marrying one woman while he was engaged to another”と“One of Edward’s mistresses was Jane Shore”を取り上げているが、“Jane Shore”は戯曲化されているので読む価値はないと言明している。“a widow who poor woman!”な王妃エリザベス・ウッドヴィルが、最後に“monster of iniquity and avarice Henry the 7th”によって修道院に監禁されたのに対し、ジェインは同情の余地を表しているが、これはジェインの道徳心の現われかもしれない。

4-5. エドワード5世

エドワード5世(1470-83、1483年4月10日-6月26日)は母エリザベスが妊娠9ヶ月のとき、エドワード4世の廃位を目指すウォーリック伯から逃れるため、教会の庇護権を頼りにウェストミンスター寺院で誕生した。復位した父は生後6ヶ月のエドワードを皇太子に叙し、コーンウォール公、チェスター公、ソールズベリー伯、マーチ伯、ペンブルク伯まで与えた。バラ戦争時、父エドワード4世はヘンリー6世と皇太子エドワードまで処分した弟のグロスター公を信頼していた。しかし、父の逝去後すぐに牙をむいたグロスター公は重

鎮たちを廃除し、エドワード5世と弟ヨーク公リチャードを言葉巧みにロンドン塔に幽閉した。当時のロンドン塔は牢獄や処刑場を持つ王宮であったため、ロンドン市民の疑惑をそらす事はできたが、二人は秘密裏にグロスター公によって殺害されたと考えられた。

夏目漱石が『倫敦塔』に描いた世界は、フランスの肖像画家で歴史画家でもあるポール・ドルラロッシュの「ロンドン塔の若き王と王子」(1803年)の絵をヒントとしたと言われている。叔父リチャード3世の謀略で殺されたとするジェインは、“lived so little a while that no body had time to draw his picture”という理由で肖像画がないとしている。エドワード4世は結婚前にシュルーズベリー伯エリナー・トールバットと婚約していたので、エドワード5世とリチャード兄弟は庶子となり、王位継承権資格がなく、次期国王リチャード3世はグロスター公リチャードの時代から正当な継承者だと自認していた。ジェインは波乱万丈なエドワード5世の描写をわずか4行で終えている。その中の“unfortunate”と“He was murdered by his uncle’s contrivance, whose name was Richard 3rd.”は、彼の短い人生と悲惨さの強調である。

4-6. リチャード3世

リチャード3世(1452-85、1483-85)はヨーク家3代目の最後の国王で、長兄がエドワード4世になるとグロスター公に叙爵され、兄に協力してスコットランドからの侵略に備え、イングランド中部以北の統治にあたり領民からも信頼された。即位後は国政に関わる者の職権乱用を封じる法案を議決させ、蔓延していた強制献金を禁じ、現在まで継続する紋章院(The College of Arms)を創設した。紋章の重要さとその使用と許可は紋章官の監督下にあったが、その上部に国王直属の機関を置くなど、善政で良い為政者であったが、甥のエドワード5世とヨーク公リチャード兄弟をロンドン塔に幽閉し、謎の死へと送った残忍無慈悲で奸智陰険と呼ばれた。そのころ政情不安定と見たランカスター派のリッチモンド伯ヘンリーが、亡命先のフランスから1485年に帰国すると、リチャード3世とリッチモンドは戦闘開始し、リチャード3世は敗死した。

ジェインはリチャード3世の悪人扱いに不満げで“in general a very respectable man”と、さらに“as he was a York, I am rather inclined to suppose him a very respectable man”と、ヨーク派への傾倒ぶりを見せている。一方で、二人の甥と妻の殺害に関しては“he did not kill his two nephews . . . if this is the true case, it may also be affirmed that he did not kill his wife”と、一般的判断を容認していない。その根拠は、“he did not reign long in peace, for Henry Tudor E. of Richmond as great a villain as ever lived”である。実際、肖像画は片方下がった肩、せむしで短身、残忍性と狡猾な眼力、無慈悲な薄い唇という特徴からリチャード3世は性悪とされているが、18世紀にホレイショウ・ウォルポールのリチャード見直し論以後、特に20世紀になってからは、ヘンリー7世にこれらの特徴が合致すると考えられるようになった。

4-7. ヘンリー7世

ヘンリー7世(1457-1509、1485-1509)はチューダー家初代国王で、リッチモンド伯エド

マンド・チューダーと初代サマーセット公ジョン・ボーフォートの娘マーガレットの間に誕生した。父方の祖母はヘンリー5世の未亡人キャサリン・オヴ・ヴァロア、母方の曾祖父はエドワード3世の4男ランカスター公ジョン・オヴ・ゴントで、イングランド王位継承権者の有資格者だった。しかし、父方はイングランド王家の血の繋がりがなく、母方のジョン・オヴ・ゴントが庶子だったので、王位継承権を否定される家系であった。そこで母マーガレットは王位継承権保持者エドワード4世の長女エリザベスをヘンリーの妻にと目論んだ。後日、ヘンリー7世がスタンダードにエドワード3世の百合の花(フラ・ダ・リ)と、マーガレットのボーフォート家、つまりランカスター家ゆかりの落とし格子(ポートカリス)を加えたのは、エドワード3世を祖先とするランカスター公との繋がりを誇示するためだった。一方、ヘンリー7世には時流を見抜く才能があり、バラ戦争後の社会秩序を立て直し、強力な裁判権を有す星法庁(The Court of Star Chamber)を1487年に設置し、官僚機構に近い中央政府的機関の国王評議会(King's Council)の権限を強化した。ただ議会在1497年から1504年まで開催されなかったことから、内政面では安泰だったようだ。外交面では1489年にスペインとメディナ・デル・カンポ(Medina del Campo)を締結してフランスに対抗し、さらに皇太子アーサーとキャサリン・オヴ・アラゴンとの婚約で同盟関係を強固にし、1492年エターブル条約(Treaty of Etaples)でフランスとの平和関係を維持するなど、ヨーロッパ諸国でヘンリー7世の外交手腕は評価された。

ヘンリー7世の血脈からの王位継承権について、ジェインはヨークのエリザベスとの結婚を“This monarch soon after his accession married the Princess Elizabeth of York, by which alliance he plainly proved that he thought his own right inferior to hers”と説明し、王位継承に疑問を呈してはいるもののヨーク派だとしている。ヘンリー7世の4人の子供(男女それぞれ2人)の“the elder of which daughters was married to the King of Scotland”が、歴史的な重要人物になることを仄めかし、“The youngest, Mary married first the King of France and secondly the D. of Suffolk, by whom she had one daughter, afterwards the mother of Lady Jane Grey”と描くことで、スコットランドとの繋がりと不幸な女王の存在を暗示している。しかも“inferior”な容姿、“amiable”な人格、“reading Greece”の教養から、ジェインの女性観が垣間見られる。

4-8. ヘンリー8世

ヘンリー8世(1491-1547、1509-47)はチューダー家第2代国王で、エラスムスやジョン・スケルトンからラテン語、フランス語、スペイン語を学び、スポーツ、音楽、舞踏、騎馬をこなすインテリ・プリンスと評された。さらに法皇レオ10世から *Assertio Septem Sacramentorum* (『七つの秘密の擁護』)でのマルティン・ルター批判が評価され「信仰の擁護者」と絶賛され、神聖同盟に加盟しフランスの同盟国スコットランド軍に大勝もし、ローマ法皇やスペイン王カルロス1世(皇帝カール5世)との協調に成功した。

即位直後の18歳で兄アーサーの未亡人で24歳のキャサリン・オヴ・アラゴンと結婚し、男子誕生が期待できないことで離別を望むが、キャサリンの甥の神聖ローマ帝国皇帝カール5世でスペイン王カルロス1世が法皇クレメンス7世に圧力をかけたため、ローマからの離

別許可が下りず、キャサリンとは正式に結婚していなかったとして離別した。これが原因でローマとの断絶が決定的になり、1534年ヘンリー8世は国教会を発足させ、強権発動で修道院を解散し取り壊し、当時10万8千ポンドを国庫収入とした。これも国王至上法(Act of Supremacy)による彼の政治的・宗教的存在を見せ付けるものとなった。

再婚したアン・ブーリンにも男子誕生が見込めなかったので、不義の理由をつけロンドン塔で処刑した。その10日後にジェイン・シーモアと再婚するが、王子出産直後に死去した。その後アン・オヴ・クレーブズとは結婚生活を送ることなく離婚し、さらにアン・ブーリンの従姉妹のキャサリン・ハワードと結婚するが、年齢差とキャサリンの不倫で処刑し、最後の王妃キャサリン・パーと1543年結婚した。繰り返される処刑と結婚は、ヘンリー8世の強権下で発足した国教会において可能であり、王妃以外にも宰相3人、聖職者など重鎮50人以上を処刑した。最初の王妃キャサリンのメアリー(後のメアリー1世)とアンのエリザベス、そしてジェインの生んだ7歳の皇太子は最後の王妃キャサリンによって良質な教育が施された。私的な問題を抱えたヘンリー8世だったが、公的には強力な中央集権制と海軍力増強と郵便制度の原型を作ったことが成果である。

ジェインはヘンリー8世の統治を“not as well acquainted with the particulars of this King's reign”と認知していない。また“only a slight sketch of the principal events which marked his reign”とするなど、彼の私的な部分から君主とは認め難いようだ。アン・ブーリンに関しては、“justice, and my duty to declare that this amiable woman was entirely innocent of the crimes”と“her beauty, her elegance, and her sprightliness”から彼女の人間性を認め、ヘンリー8世に対して義憤を覚えたようだ。そのヘンリー8世を“not to mention her solemn protestations of innocence, the weakness of the charges against her, and the king's character”、しかも“(as this history I trust has fully shown)”という挿入部分は強い断罪でもある。“The crime and cruelties were too numerous to be mentioned and nothing can be said in his vindication”と容赦ないジェインは、5番目の妻キャサリン・ハワード“the Duke of Norfolk's niece”が、結婚前に“have led an abandoned life”を送ったという一般論に対し、“I have many doubts, since she was a relation of that noble Duke of Norfolk”と“so warm in the Queen of Scotland's cause”を根拠に、ヘンリー8世の偏狭な自己愛だと捉え、彼を“no religion himself”と断罪してもいる。

4-9. エドワード6世

エドワード6世(1537-53、1547-53)はチューダー家第3代国王で、ヘンリー8世とジェイン・シーモアの間生まれ9歳で即位したが、歴代皇太子の中で唯一プリンス・オヴ・ウェールズに叙されていない。育ての親ともいえる王妃キャサリン・パーはエドワードの教育に腐心し、それに応えた彼は熱心なプロテスタントになった。しかしスコットランドとの融和政策や農地の囲い込みに失敗し、成果は上がらなかった。

ジェインはエドワード6世というより、彼を取り巻く人物を多く描いている。一人目はサマーセット公である。ジェイン・シーモアの兄で“Protector of the realm”と紹介し、

“a very amiable character”でお気に入りだとしている。次に「9日間の女王」(The Nine-Day Queen)と称されるジェイン・グレイ(1537-54)である。サフォーク公ヘンリー・グレイとヘンリー7世の3女を母に持つ彼女は、ノーサーバーランド公ジョン・ダドリーによってエドワード6世の王位継承者に担ぎ出された。このジェイン・グレイを“displeased with being appointed queen”としたのもジェインの皮肉である。また“the Lady Jane Grey, who has been already mentioned as reading Greek”や、ロンドン塔での処刑前に“she wrote a sentence in Latin and another in Greek”と教養があるかのようにジェインは記しているが、オリヴァー・ゴールドスミスの『イングランド史』では、“where she had just written three sentences on seeing her husband’s⁶ dead body, one in Greek, one in Latin, and one in English”(3.50)後に露と消えたかと描かれている。教養の有るなしで継承者が決まるはずもないと揶揄したかったジェインは、最後に“Whether she really understood that language or whether such a study proceeded only from an excess of vanity”とジェイン・グレイの教養に疑問を持っている。

4-10. メアリー

ヘンリー8世とキャサリン・オヴ・アラゴンの8人の子供のうち唯一成人したのがメアリー(1516-58、1553-58)であるが、父の繰り返される結婚と離婚で庶子とされ、プリンセスの称号を剥奪された。幼少時からスペイン出身の哲学者などに教育されカトリックであった。後にプロテスタントへの改宗を拒否し、法皇至上権の復活という強硬姿勢からプロテスタントを弾圧し、「ブラディ・メアリー」(Bloody Mary)と揶揄された。従兄弟のスペイン国王カルロス1世(神聖ローマ帝国皇帝カール1世)に助言を求め、その長男フェリペ(後のスペイン国王フェリペ2世)と結婚し、スペインへの恐怖でワイアット反乱がおきたときも、メアリーはカンタベリー大司教ら約300人のプロテスタント指導者を処刑した。つまり強圧から見える彼女の宗教心は、両親への屈折した想いである。また彼女の玉璽(グレート・シール)の右半分はイングランド女王としてのものだが、左半分はフェリペ2世のもので、彼がナポリ王でシチリア、オーストリア、ミラノ、ブルゴーニュ、ブラバント、チロルなどの主権者だったことで複雑な構成になっている。彼女の母への愛と哀れみ、そして増幅した父への反抗心がこの複雑な玉璽を作ったといえる。

ジェインは“beauty of her cousin Mary Queen of Scotland and Jane Grey”を引き合いに、メアリーの欠けた部分が、“had the good luck of being advanced to the throne of England”だとしている。一方、多くのプロテスタントの殉教者や“Armadas”(無敵艦隊)やスペイン国王との結婚、そして“without issue”な最期を迎えたことを“the dreadful moment came in”と結んでいる。しかも、ジェインがメアリーを“the deceitful betrayer”としたのは、玉璽の紋章がスペインへの従属を示したからであろう。後のメアリー2世(1662-94、1689-94)が夫のオレンジ公ウィリアム(1650-1702、1689-1702)と共同君臨したが、他国に従属した紋章を使用したのはメアリーだけであり、ジェインはこの事実も知っていたことになる。

4-11. エリザベスとスコットランド女王メアリー

エリザベス (1533-1603、1558-1603) は、祖母エリザベス・オヴ・ヨークに因んで命名されたチューダー家最後の女王である。母アン・ブーリンの不義密通による処刑で、王位推定相続人を外され庶子とされ、異母姉メアリー在位中はトマス・ワイアット叛乱への疑念からロンドン塔に収監された。メアリーは最期に犬猿の仲のエリザベスに王位継承を同意したが、フランス国王アンリ2世から「庶子のエリザベスには王位継承権はなく、息子フランソワの嫁メアリー(スコットランド女王)こそが正当な継承者」という横槍が入った。しかし、議会はエリザベスを嫡出子と決定した。

エリザベスは王妃キャサリン・パーから受けた教育の成果で当代唯一の教養豊かな女性に成長し、1559年には首長令(Act of Supremacy)と礼拝統一令(Act of Uniformity)を發布し、国教会の基盤を確立したが、十字架を着けるなど現実主義者でもあった。スペインの無敵艦隊アルマダを1588年に撃破し、イングランドの大国への道を開いた。海賊のフランシス・ドレイクのスポンサーとして拿捕私船(privateer)を与えてもいた。つまりスペイン船を狙い撃ちし、当時20万ポンドの国家予算の3倍を略奪し蓄財に成功したのである。そして大航海時代の覇者スペインに勝利し、海外進出と重商主義で強国とし、1600年設立の東インド会社でアジア進出も果たした。内政では有能な中流階級を登用し、絶対主義者らしく在位45年間に10回しか議会を開催しなかった。結婚に関しては、貴族間対立や諸王侯と危惧するとして独身を通したようだ。

一方、スコットランド女王メアリー(1542-87、1542-67)はスコットランドスチュアート家第8代で、父ジェイムズ1世の死後7日で即位した。イングランドとの確執を心配した母マリー・ドゥ・ロレーヌはメアリーをフランス宮廷に送り、その後フランス皇太子フランソワ(後のフランソワ2世)と結婚し、スコットランド女王を兼ねた。夫の死後、スコットランドに帰国したメアリーは改宗を拒否したが、改宗派の重臣登用で混乱を避けることができた。再々婚後の廃位でイングランドに逃亡後、エリザベスによって処刑されるという波乱万丈な人生であった。

ジェインはエリザベスの不幸を“to have had ministers”としながら、“wicked”であることが不幸の元凶としている。これはレスター伯ロバート・ダドリーやエシックス伯ロバート・デヴリューの存在こそが、彼女の負の部分だと言いたかったようで、“scandals to their country and their sex”な政府の要人を、“Oh! how blinded such writers and such readers . . .”と『イングランド史』で初めて感嘆符を使い、それまでのイングランド史の著者と、自分を含めた読者が盲目だと恥じている。もう一箇所は“Oh! what must this bewitching princess whose only friend was the Duke of Norfolk”である。このノーフォーク公は3代目であろうか。2代目の未亡人はエリザベスの洗礼時の名親でもあるが、メアリーの婚姻相手とされたのも一族のノーフォーク公で、彼をエリザベスは断頭台に送っていた。つまりこれもジェインの皮肉だろう。しかしジェインは“reader”に対し、“some hardened and zealous protestants have been even abused her for that steadfastness in the Catholic religion”と、エリザベスの敵である偏狭なメアリーを非難排斥できるのかと問い、“a striking proof of their narrow souls and prejudiced

judgments who accuse her”では、宗教は異なっても信念を持つべきとするジェインの持論はたいそうなものに思えるが、疑念も浮かぶ。自虐的な皮肉なのだろうか。またメアリーの死刑場所“Fotheringay Castle”をわざわざ“(sacred place!)”と記したのも皮肉である。メアリーを“ill-fated”な女王で、“I now most seriously do assure my reader that she was entirely innocent”としながら、“she was betrayed by the openness of her heart, her youth, and her education”と弱点を挙げている。つまりジェインは「彼女の心」はフランス宮廷仕込みとカトリック、「彼女の若さ」は若くして未亡人になりスコットランド女王に、「彼女の教育」はフランス宮廷での教育と帰国後の男性遍歴にあったと考えたようだ。

ところで、ジェインはドレイクを“the first English navigator”、“he will be equaled in this or the next century”と賞賛し、続けて“equally conspicuous in the character of an Earl, as Drake was in that of sailor, was Robert Devereux Lord Essex”と、エリザベスの最後の愛人とされる人物を並列している。デヴリューはプロテスタントのアンリ4世助勢に失敗し、アイルランド総督としての遠征にも失敗し、勝手に休戦条約を結んだことで処刑された全く役に立たない人物だった。そのデヴリューとドレイクを並列させることで、エリザベスの人生とヨークに繋がることに揶揄し、笑劇の対象にしたかったのかも知れない。

4-12. ジェイムズ1世

ジェイムズ1世(1566-1625、1603-25)はスチュアート家初代でスコットランド女王メアリーの息子、つまりスコットランド王ジェイムズ6世である。8ヶ月で父を亡くし、1歳で母メアリーがイングランドに亡命したので両親を知らない。しかし1603年エリザベスの死後、宰相ロバート・セシルが彼をイングランド国王継承者に決断したのは、ヘンリー8世の姉のマーガレット・チューダー(スコットランド王ジェイムズ4世の妃)の曾孫で、イングランド王位継承権者の中で最適であったためだ。国王としてカトリックのスコットランドと国教会のイングランドの宗教的対立を危惧し、各派の宗教関係者間と会議を開催するなど配慮した。しかし、カトリック弾圧の疑念からガイ・フォークス首謀の火薬陰謀事件(ガンホーダー・プロット)が起きた。これはジェイムズ1世がイングランドの内情に疎く、王権神授説(The Divine Right of Kings)を掲げたことで議会の猛反発を受けたからである。教会への干渉、介入、排除をし、同君連合(personal union)のイングランド国王として、スコットランドには1回しか帰国しなかった。しかし最後まで異国人とみなされ続けた。

ジェインがジェイムズ1世を“this king had some faults”と断言した根拠は、メアリーの死やアン・オヴ・デンマークとの結婚、さらに取り巻きの裏切りで、わずかの側近に囲まれ17歳で王位に就いたからだとしている。しかし、プロテスタントとカトリックの間での彼の苦悩に対し、“I cannot help liking him”と意外な一面も見せている。これはイングランド王として努力した姿に対してであろう。つまりジェインは信念を持って行動する人間には好意的ということになる。一方、“I am myself partial to the roman catholic religion”とする中で、“in this reign the roman Catholics of England did not behave

like gentlemen to the protestants”とした判断は、ジェイムズ1世の力量を総括しても、宗教的影響が大きかったというジェインの宗教心と異国人国王への揶揄とも取れる。

4-13. チャールズ1世

チャールズ1世(1600-49、1625-49)は、スコットランド王ジェイムズ1世の次男で、3歳の時に父がイングランド国王に就き、兄の早世により12歳でイングランドとスコットランドの皇太子になり、1625年に両国の国王に就いた。フランス王アンリ4世の娘との結婚で宗教的に溝ができ、ピューリタンを弾圧しニュー・イングランドへ追いやった。また父の王権神授説を継承したため、議会の「権利の請願」(The Petition of Rights)上程後11年間専制に走り、その間、フランスやスコットランドに対して新教徒救援と統一に力を注ぐと、議会から戦費調達を要求され大諫議書(The Grand Remonstrance)の可決となった。これにより王党派と議会派間の紛争が続き、オリヴァー・クロムエル軍に敗れスコットランド軍に投降後、議会軍に引き渡された。国外逃亡もできたが、「余は誰よりも人民のための自由と権利を望み闘ってきた。剣による力に抵抗することを余が放棄していたなら、今日ここに来ることなかったであろう。余は人民のための殉難者である。朽ちやすい王冠の国から争いのない不朽の王冠の国へ今から行く。」(森護訳)と、イギリス国王として唯一人民裁判で刑死した。一般に執行後は歓喜の声が上がるが、処刑に反発するどよめきが鳴り止まなかったと言われている。

チャールズ1世を“This amiable monarch seems born to have suffered misfortunes”とした理由をジェインは、“equal to those of his lovely grandmother”としている。つまり彼の不幸はスチュアートにあるということになる。ジェインは大方のイングランド人がスチュアートに対し、“to rebel against, dethrone and imprison...to oppose, to deceive, and to sell”だと捉えた。さらに治世は“The events of this monarch's reign are too numerous”であるが、“the recital of any events is uninteresting to me”と無関心を装ってもある。基本的に“undertaking the history of England being to prove the innocence of the Queen of Scotland”としているが、“I shall satisfy myself with vindicating...he has often been charged.”という言及は、“I am certain of satisfying every sensible...have been properly guided by a good education”というジェイン自身の読書量、ひいては教養の豊かさを誇示しながら、「不公平で、偏った、無学な歴史家による」の皮肉と揶揄だとしてペンを置いたと考えられる。

5. さいごに

ここで周知の批評を示しておく。「彼女は細密画家である、登場人物全てが立体的……計り知れない幸福感に包み込まれて……」(E.M.フォースター)、「驚くほどのリアリティとその描写からたち現れる繊細で、際立った人間の特徴から散文世界のジェイクスピア……」(ジョージ・エリオット)は、いずれも女流小説家ジェイン・オースティンを賞賛するものである。しかも一般に、彼女の作風のキーワードは、皮肉、揶揄、笑いがあげられるが、

『イングランド史』での君主描写もこれらに合致すると理解できた。

またジャン・ファergusは、イングランドのエリザベスとスコットランド女王メアリーの描写について、『『イングランド史』は修正主義的意図が見られ……メアリーとエリザベスの性格にも見解の修正を行っている……それ以上に重要なことは、二人の女性像を描いたという点である。ジェインの『イングランド史』以前の歴史書にはほとんど女性が登場していないという点である。』⁷と述べている。本研究ノート4-11. で見出しを「エリザベスとスコットランド女王メアリー」としたが、今回のテキスト『イングランド史』ではエリザベスに続いて彼女の挿絵が入り、ジェインの語りが始まる。しかし、メアリーに関してはエリザベスとメアリーの人生を語る途中で、挿絵が入っている。しかも挿絵の紹介かと思えるほどのスコットランド女王メアリーの提示である。二人を併記したことにさらには検証が必要であるし、カサンドラが挿絵に込めたジェインと共通する皮肉や揶揄についても詳細に見ていく必要がある。そのためカサンドラの絵画力をロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーの君主像と比較する必要性を感じた。

また10代のジェインの作品ということで、語彙にも偏りがあるように思われる。例えば本研究ノートに引用した中に“amiable”が6回登場する。このような語彙の使用についてもさらに検証の余地がある。

注

1. テキストは *Sanditon, Lady Susan, & The History of England* by Jane Austen, Macmillan Collection's Library, 2016 である。引用は、綴りの誤り以外は全て原文のままである。
2. 『ジェイン・オースティンの生涯』 *Jane Austen* by Carol Shields, p.47、内田能嗣・惣谷美智子監訳。
3. 『第1巻』 (*Volume the First*): 「フレデリックとエルフリーダ (“Frederic and Elfrida”)」、 「ジャックとアリス (“Jack and Alice”)」、 「エドガーとエマ (“Edgar and Emma”)」、 「ヘンリーとイライザ (“Henry and Eliza”)」、 「ハーリー氏 (“Mr. Harley”)」、 「サー・ウィリアム・モンタギュー (“Sir William and Mountague”)」、 「クリフォード氏 (“Mr. Clifford”)」、 「美しきカサンドラ (“The Beautiful Casandra”)」、 「アミーリア・ウェブスター (“Amelia Webster”)」、 「訪問 (“The Visit”)」、 「謎 (“The Mystery”)」、 「三姉妹 (“The Three Sisters”)」、 「断片 (“Detached Pieced”)」、 「種々の精神に感受性が及ぼすさまざまな影響を美しく描写した物語 (“A Beautiful Description of the Different Effects of Sensibility on Different Minds”)」、 「寛大な副牧師 (“The Generous Curate”)」、 「哀しみに寄せる頌詩 (“Ode to Pity”)」
『第2巻』 (*Volume the Second*): 「愛と友情 (“Love and Friendship”)」、 「レスリー城 (“Lesley Castle”)」、 「イングランド史 (“The History of England”)」、 「手紙あれこれ (“A Collection of Letters”)」、 「断片 (“Scraps”)」、 「女優哲学者 (“The Female Philosopher”)」、 「ある喜劇の第一幕 (“The First Act of a Comedy”)」、 「若き淑女からの手紙 (“A Letter form a Young Lady”)」、 「ウェールズ一周旅行 (“A Tour through Wales”)」、 「ある物語 (“A Tale”)」
『第3巻』 (*Volume the Third*): 「イヴリン (“Evelyn”)」、 「キャサリンあるいは東屋 (“Catherine,

or The Bower”。

※習作巻の短編ではあるが、本研究ノート内ではテキストのタイトルから『イングランド史』とする。

4. 『ジェイン・オースティン事典』 *A Jane Austen Encyclopedia* by Paul Poplawski, p. 224、向井秀忠監訳。
5. カッコ内に生没、在位期間を示し、史実とジェインの描出を検証する。
6. ノーサーバンランド公の4男、ギルフォード・ダドリーのこと。
7. 前掲、p.216。

参考文献

1. 『英国王室史事典』、森護著、大修館書店、1994年。
2. 『英国王室史話』、森護著、大修館書店、1997年。
3. 『ジェイン・オースティン事典』 *A Jane Austen Encyclopedia* by Paul Poplawski、向井秀忠監訳、鷹書房弓プレス、2003年。
4. 『ジェイン・オースティンとその時代』、鈴木美津子著、成美堂、1995年。
5. 『ジェイン・オースティンの生涯』 *Jane Austen* by Carol Shields、内田能嗣・惣谷美智子監訳、世界思想社、2009年。
6. *A Portrait of Jane Austen*, by David Cecil, Hill and Wang, New York, 1979.
7. *ELIZABETH AND MARY — Cousins, Rivals, Queens*, by Jane Dunn, Vintage Books, N.Y., 2005.
8. *JANE AUSTEN — A Family Record*, by Deirdre Le Faye, Cambridge U.P, 2004.
9. *JANE AUSTEN—HER LIFE, HER TIMES, HER NOVELS*, by Janet Todd, Andre Deutsch, London, 2003.
10. *The Complete Works of Oliver Goldsmith — History Of England*, Scholar Select, University of California Berkeley, 1969.
11. *The Great Tradition*, by F.R. Leavis, Chatto and Windus, London, 1948.